

メカジキ 南大西洋

Swordfish, *Xiphias gladius*



利用・用途

刺身、寿司、切り身（ステーキ）、煮付け

管理・関係機関

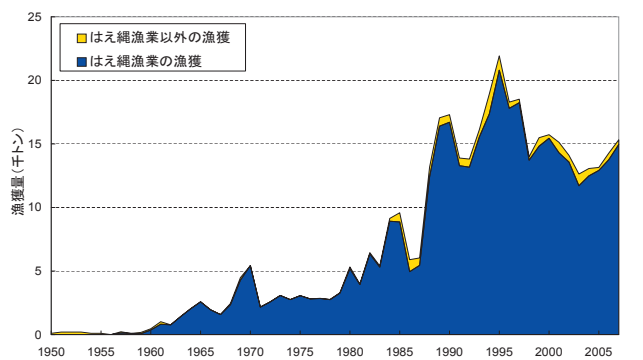
大西洋まぐろ類保存国際委員会（ICCAT）

漁業の特徴

1980年代末までは、主に日本・台湾・韓国などにまぐろ類が主対象のはえ縄で混獲され、総漁獲重量は1万トン未満であった（図参照）。1989年から本種を主対象とする浅縄操業でスペインはえ縄船団が参入し、総漁獲量が急増して1995年には21,930トンとなった。その後、漁獲量は減少し2007年には15,416トンとなった。

最近一年間の動き

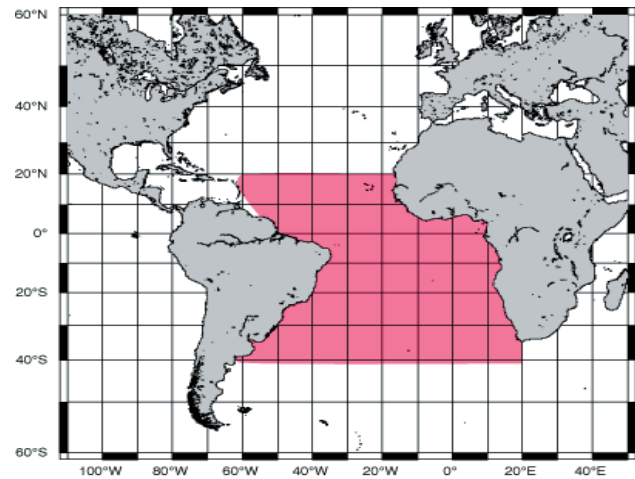
2008年度は南大西洋のメカジキの資源評価は行われていない。2006年に行われた資源評価では、本資源の資源状態は良好な状態にあるという暫定的な結果が得られているが、漁業データの不確実性が大きいため、今後も引き続き十分な調査・研究が必要である。管理方策としては、北大西洋系群と同様に、TAC(南大西洋では17,000トン)及び最小体長規制の遵守が引き続き行われる。



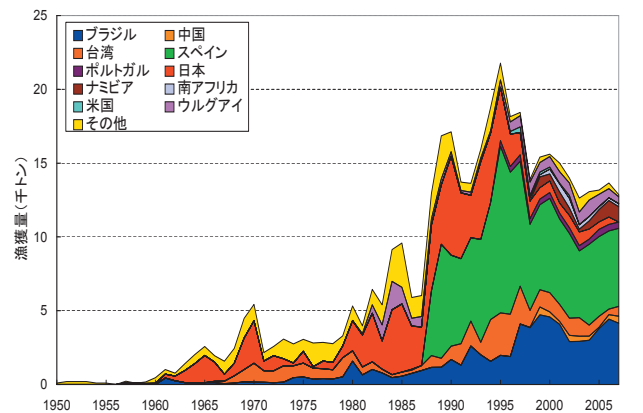
漁法別漁獲量の年推移 (1950-2007) (ICCAT 2008)

生物学的特性

- 寿命：調査中
- 成熟開始年齢：調査中
- 産卵場：熱帯～亜熱帯
- 索餌場：アフリカ沿岸・ウルグアイ沖合水域
- 食性：調査中
- 捕食者：調査中



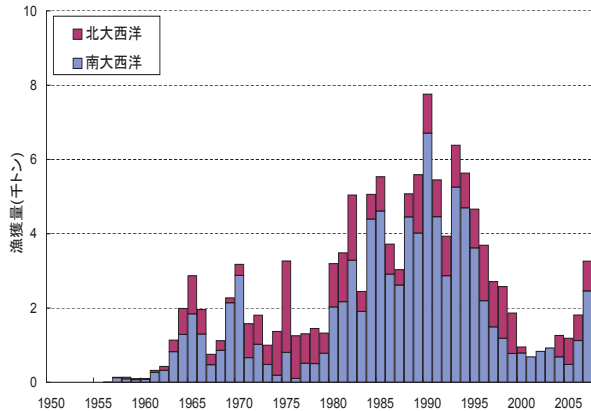
本資源の分布域



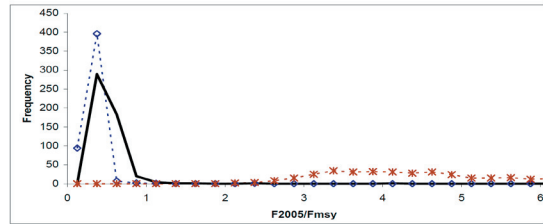
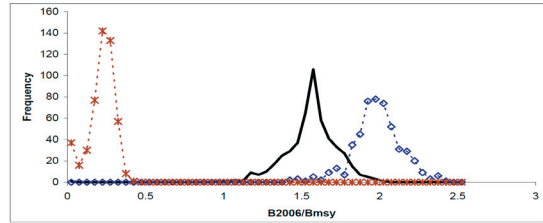
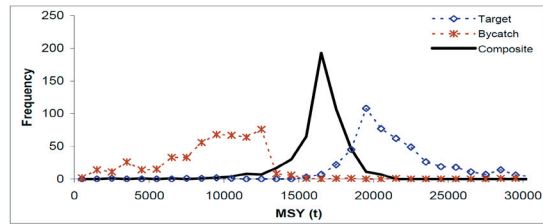
国別漁獲量の年推移 (1950-2007) (ICCAT 2008)

漁業資源の動向

1990年代中旬以降の漁獲量の減少は漁獲規制の導入と、各国のはえ縄漁船の他水域への移動や主対象魚種の変更による。しかし、ブラジル等の一部沿岸国の漁獲量は増加している。1995年以降、日本のはえ縄漁船の主漁場は北大西洋に移り、努力量の減少で漁獲量も大幅に減少し、2005年は480トンと過去最低を記録しているが、翌2006年には1,124t、2007年には2,461tと急増している。



日本の大西洋でのメカジキ漁獲量 (1950-2007) (ICCAT 2008)



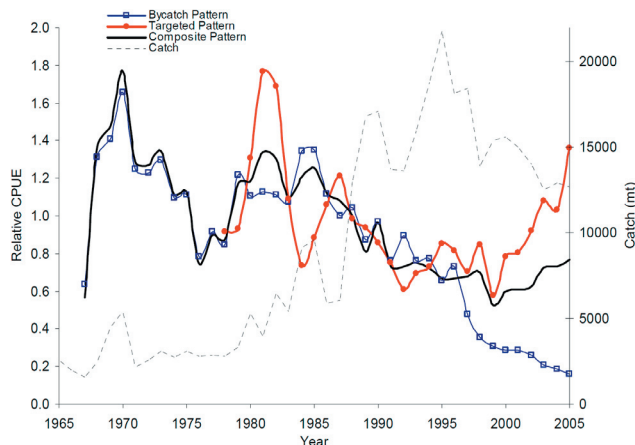
推定された MSY(上段), B_{2006}/B_{MSY} 値 (中段), および F_{2005}/F_{MSY} (下段). (ICCAT 2006b)

管理方策

資源評価結果には不明な点が多く、それを明らかにできる十分な調査・研究が行われない限り、漁獲量は推定された MSY (約 1.7 万トン) を超えるべきではないと考えられる。

資源状態

資源評価は ICAT の SCRS (科学委員会) で、加盟国の研究者が共同で実施する。本資源を混獲する漁業 (スペイン・ブラジル) と主対象とする漁業 (日本・台湾) で、1990 年代中旬よりトレンドが大きく異なったが、どちらも資源状態を正しく反映していないと考えられた。そこでこれら 4 漁業の平均化した資源量指数と、総漁獲量を用いて非平衡プロダクションモデル (ASPIC、ICCAT 公認プログラム) で解析したところ、資源状態は良好で、近年の F は F_{MSY} よりも低く、資源量は B_{MSY} よりも上にある可能性が高いという暫定的な結果が得られた。推定された MSY (約 1.7 万トン) は、最近年の漁獲量よりも 9% 高い。



プロダクションモデルに使用した 3 つの資源量指数と漁獲量 (ICCAT 2006a)

資源評価まとめ

- 資源評価は ICAT の SCRS (科学委員会) で実施
- ASPIC により資源評価した結果、信頼性は低いものの MSY は 17,000 トン程度と推定された
- 資源水準は恐らく中位漸増

資源管理方策まとめ

- 資源水準を MSY レベル以上に維持する
- TAC を推定された MSY の約 1.7 万トン以下に抑える
- 小型個体 (下顎又長 125cm / 体重 25kg 未満) の水揚げ量を 15% 以下に抑えるか、下顎又長 119cm / 体重 15kg 未満の個体の水揚げ量を 0% にする

メカジキ (南大西洋) の資源の現況 (要約表)

資源水準	中位
資源動向	増加
世界の漁獲量 (最近 5 年間)	12,630 ~ 15,330 トン 平均: 13,690 トン
我が国の漁獲量 (最近 5 年間)	480 ~ 2,460 トン 平均 1,135 トン